

韓国における多文化保育とアンチバイアス教育
—ソウル市およびその近郊の保育機関における調査より—

Multicultural and Anti-Bias Education in Korea:
Practices in Child Care Centers in and around Seoul

山田 千明*
Chiaki Yamada

要約

国際化の進展により、日本の保育機関においても外国人の子どもが在籍するようになった。これからの教育や保育に求められるのは、多文化共生社会の構成員としての人間形成である。

本稿の目的は、日本での国際化に対応する保育や教育を展望するため、多民族国家であるアメリカで実践されている多文化教育やアンチバイアス教育が「単一民族国家」であるとされる韓国においてどのように展開されているか明らかにすることである。そのために、文献により韓国の多文化教育の動向を調べ、かつ、2002年9月にソウル市およびその近郊の保育機関において、園長、保育士への面接調査および保育実践の観察を行った。

特にI子どもの家（保育園）においては、アメリカのアンチバイアス教育を導入しつつも、韓国の状況に合わせたカリキュラムを作成し、実践していた。

多民族国家アメリカが人種の違いのような可視的差異を問題とするのに対し、韓国や日本のようなアジアにおいては、可視化されない差異に注目しており、それぞれの地域の実情に合わせたアンチバイアス教育の展開を考える必要性があると指摘した。

キーワード：外国人、多文化保育、アンチバイアス教育、韓国、不可視的な差異

* 児童福祉学専攻

はじめに

現代社会はまさにボーダレスで、地球規模でヒト、モノ、カネ、情報が動いている。日本の保育機関に在籍する日本語指導が必要な外国人幼児の正確な統計はないが、日本の公立小・中・高等学校等に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は19,250人、在籍学校数も5,296校と、いずれも過去最大となった（2001年9月現在）⁽¹⁾。文部科学省では、外国人児童生徒等に対する日本語指導等の取組みを支援するため、2001年度～2002年度の2ヵ年計画で、「学校教育におけるJSL（第2言語としての日本語）カリキュラムの開発」事業を実施し、2002年8月には、小学校における教科学習に対応した日本語指導「JSLカリキュラム」の開発作業の「中間まとめ」が公表された。また、厚生省（当時）が作成する保育所保育指針にも、1990年より「外国の人など自分とは異なる文化を持った人の存在に気づく」（4歳児）、「外国の人など自分とは異なる文化を持った様々な人に関心を持つようになる」（5歳児）、「外国の人など自分とは異なる文化をもった様々な人に関心を持ち、知ろうとするようになる」（6歳児）という記述が新しく加えられた。このように、日本においても、教育や保育の現場で、異なる文化をもつ子ども達の存在について配慮する動きが出てきている。

そこで、これからの教育や保育に求められるのは、多文化共生社会の構成員としての人間形成であるという観点から、多文化保育の諸外国の動向を捉え、その望ましいあり方を考えるため、本稿では、大韓民国（以下韓国と表記）の動向について取り上げ考察したい。

1. 韓国の多文化教育の背景

2000年9月に韓国の中央幼児教育学会主催2000年度幼児教育学術大会が「多文化時代の幼児教育」というテーマで開催された。そこで論議された内容を収録した論文集の中にホウォン大学校のクァックヒャンニム氏がまとめた「幼児教育機関における多文化教育カリキュラム」がある。その中で同氏は、韓国の教育機関における多文化教育導入の必要性について、次のように述べている。

世界は、大部分の国が多民族国家と多文化社会として、あらゆる民族と国家が共同の繁栄を享受するべきだという趨勢にある（イクァンギョ、1998）。われわれも今や時代的な流れに逆らうことはできず、多文化時代に入っている。したがって、学校ではこのような時代的な変化に即して、子どもが多様性の中で調和のとれた公平な人生を送れるよう準備を整えるカリキュラムを用意しなければならないだろう。⁽²⁾

韓国の教育分野における研究者らは、諸外国の教育動向について関心が深く、多文化教育に関してはアメリカ合衆国（以下アメリカと表記）の研究者の影響を受けており、クァックヒャンニム氏は、「幼児教育機関における多文化教育カリキュラム」において、Morrison、Bright、Wardle、Banks、Bennett、Derman-Sparks、New、Ramsey、

SleeterとGrant、HyunとMarshallらの理論を引用しながら、多文化教育の動向を概観した上で、韓国における保育機関における多文化教育について述べている。

その中で、同氏は、韓国について「例外的な単一民族国家として、我が国の中においては、多文化や多民族の葛藤が大きなイシューになるものではない。」と、その特性を述べている。一方、「開発途上国にいるアジア人として（中略）我々は諸側面で不利な位置にあり、不平等な待遇を受ける素地を多く抱えているというのが事実」と、国際社会において韓国は「偏見と差別を受ける」立場であると述べ、さらに、「わが民族の内部にも、明らかに差別と偏見は存在」しており、国内的には、「国内における地域間」「社会階層間」「ジェンダー」「世代」「家族と家族」「個人と個人」において、「我が民族の中においても多様な偏見と差別」があると指摘している。そこで、以上のような「現実的自覚」が「アンチバイアス教育に関する諸著書の翻訳や紹介」、「アンチバイアス童話シリーズ（子ども育英会編、2000）の登場」として「我が国においても実質的な多文化教育への関心を呼び起こしている」と韓国の多文化教育の背景を説明している。

2. 韓国の保育機関

日本の保育所に在籍する外国人の子どもの保育を考える時、その子ども達の出身国での保育について知る必要があると考え、筆者ら研究グループ^③は、2001年度より、台湾、韓国、中華人民共和国（以下中国と表記）等の保育機関を調査している。

その研究の一部として、本稿では、韓国の保育機関を取り上げる。韓国の保育機関には、教育部管轄下の「幼稚園（ユチオン）」と保健福祉部管轄下の「子どもの家（オリニチップ）」がある^④。ここでは、2002年9月9日～9月11日に筆者が調査したソウル特別市およびその近郊の7機関（幼稚園2機関、子どもの家5機関）に加え、1999年11月1日に訪問した2機関^⑤（幼稚園1機関、子どもの家1機関）の内、子どもの家に焦点を当て、子どもの家6機関における保育実践の中から、多文化保育に関する実践を検討する。

子どもの家6機関を異文化を背景にもつ子どもの在籍で分けると次の通りである。

- ① 外国人の子どもや国際児^⑥が在籍する、あるいは在籍したことのある子どもの家

（P子どもの家、T1子どもの家、I子どもの家）

- ② 外国人の子どもが在籍しない子どもの家

（U子どもの家、T2子どもの家、C子どもの家）

※U子どもの家とI子どもの家は同じ系列の子どもの家で、この系列の子どもの家は韓国に32ヶ所あり、それぞれ特徴のある保育を実施している。

※P子どもの家、T1子どもの家、I子どもの家は同じ地域にある。この地域の特徴として、米軍基地が近くにあり、欧米系の外国人が多く居住する。

※C子どもの家は政府職員の子どものが多く、海外に滞在経験をもつ帰国の子どもも在籍している。

3. 多文化に対する配慮

モンテッソリー教育を採用している保育機関は、「文化領域」で世界について学ぶため、子どもの家（T2子どもの家、C子どもの家）および幼稚園のすべてにおいて、世界地図、各国の国旗等の教材を用意していた。また、調査した子どもの家や幼稚園では、主題活動（テーマ別の活動）を採用しており、壁面に、それぞれの学習をした時に保育者が作成したものや子どもの作品が貼られていた。たまたま2002年も1999年も筆者が訪れたのが秋であったので、多くが中秋に合わせて「伝統的な文化」を取り扱っていた。U子どもの家では、5歳児が11月中旬～12月にかけて、白菜を買ってきて、キムチを伝統的な瓶で漬け込む作業を行うという話であった。

P子どもの家（公立）において、多文化教育に関する主題活動はあるのか尋ねたところ、昨年度も「世界の国々」をテーマにした4歳児クラスの活動を行ったとの回答が得られ、その週案をみせてもらった。そこには、「ニューヨークに住んでいるジェニー」「国家パズル」「世界の音楽」「アメリカ先住民の帽子作り」「世界旅行」「ドイツのゲーム」といった活動が記されていた。

また、どこの子どもの家や幼稚園を訪れても目についたのが韓国の「国旗」である。

U子どもの家において、保育室にきれいなポスター状の教材（4枚セット）が貼られていた。ハングル文字のところどころに絵文字があり、絵文字は、「太極旗」（韓国の国旗）、「虎」、「朝鮮半島の地図」、「日章旗」（日本の国旗）、「首を傾げている女の子の顔」、「（パクヨンヒューという名の）男性の顔」、「太極」（赤と青で構成される円）、「白地の旗」、「卦」、「船」である。これは、市販されている幼児用の教材で、太極旗の由来を説明したものであった。4枚のポスターに書かれている内容は次の通りである。（「」内は絵文字）

<1枚目>

「太極旗」を作った人

昔々、「虎」が煙草を吸っていた頃^①、「朝鮮半島の地図」には国旗がなかったそうです。「太極旗」はいつ作られたのでしょうか。「首を傾げている女の子の顔」とても知りたいでしょう？

<2枚目>

「朝鮮半島の地図」（国）の名前が朝鮮であった時、「男性の顔」（パクヨンヒュー）という方が、朝鮮を代表して、「日章旗」（日本）に行くことになりました。この方は、「朝鮮半島の地図」（朝鮮）の人々が、「日章旗」（日本）に来たということを、どのように知らせるか考えました。

<3枚目>

そこで、昔から「朝鮮半島の地図」（国）で使っていた「太極」（赤と青からなる丸）という模様で「太極旗」を作ろうとしました。「白地の旗」に「太極」の模様と「卦」の模様を描いて「太極旗」を作りました。

<4枚目>

そこで、「男性の顔」(パクヨンヒュー)という方が、乗っていく「船」に「太極旗」を掲げ、「日章旗」(日本)でも「太極旗」を持って歩き回ったそうです。このように作られた「太極旗」が今まで続いて使われているそうです。

日本では、昔、子どもが泣くと、「鬼」に連れて行かれるから泣き止むように、と言った。韓国では、「鬼」の代わりに「豊臣秀吉」が来るから泣き止むようにと言う、と韓国の日本人学校で勤務した経験をもつ教員から聞いたことがある。そのようなことも踏まえ、筆者は、このポスターに出会うまで、韓国の人々は、日本との歴史的経緯により、日章旗に複雑な感情があるのではないかと考えていた。

国際理解教育という、異文化理解と共に「日本人として、また、個人として自己の確立を図る」⁸⁾という文言が出てくることが多い。「地球市民」「個」としての在り方と「国民国家」の「国民」という枠組みとの関係から、国民統合の手段として国旗を用いることについては、注意深い検討が必要であるが、この点を踏まえた上で、次のように考える。保育の場における環境構成は非常に重要な意味をもつが、韓国の子ども達が、このようなポスターを子どもの家で毎日見て育つことが、日章旗、ひいては日本に対してマイナスイメージではなく、ニュートラルなイメージをもつことの手助けとなるとしたら、これは好ましいことではないかだろうか、ということである。

4. アンチバイアス保育の実践 (I子どもの家)

4. 1 アメリカのアンチバイアス教育

アメリカの多民族国家としての国民統合の理念は、文化的多元主義である。多文化教育とは、文化的多元主義を理論的な背景として、民族、人種、性別、社会的階層、文化的な違いにかかわらず、すべての子どもたちが平等な学校教育の機会をもつべきであるとする教育理念であり、その実現に向けた教育改革運動、教育実践である。

また、アンチバイアス教育が、1980年代頃からダーマン・スパークス (Louise Derman-Sparks) らによってパシフィックオークス大学 (アメリカ、カリフォルニア州) を中心に展開されており、具体的な保育実践については、今日アメリカにおいて人権を重視した幼児教育実践の新しい流れを代表する幼児教育実践の指導書とされている *Anti-Bias Curriculum, Tools for Empowering Young Children* (Derman-Sparks, 1989) に示されている。

アンチバイアス教育においては、単に異文化に触れるだけというツーリストアプローチではなく、人間の考え方の根幹に迫るものである。文化的多様性だけではなく、ジェンダーの問題や身体的な障害の問題も扱い、子ども達の自己認識 (identity) の形成および態度形成の発達課題を取り扱う。そして、子ども達の発達や交流の中でのステレオタイプ化、

偏見、差別的行動の影響について直接語るのである。

多民族国家であるアメリカという文脈で誕生したアンチバイアス教育の日本での展開を考える時、その文化的背景の違いから、それをそのまま導入することは難しい⁽⁹⁾。日本とアメリカの主たる相違点は、差別や偏見を生み出す差異が、髪の毛、目、肌の色といった可視的なものか、それとは別の可視化されないものであるかという点である。「自信のある自己認識および集団への帰属意識の形成」、「多様性の尊重」というアンチバイアス教育の基本は共通するが、日本と同様、可視化されない差異をもつ人々の差別が問題とされる韓国では、同教育が、どのように保育カリキュラムの中に取り入れられ実践されているのかみてみたい。

4. 2 I子どもの家における実践

韓国においては、1990年代後半よりアンチバイアス教育に関心がもたれるようになってきたが、I子どもの家でのアンチバイアス教育導入の契機は、園長が大学院博士課程で同教育と出会ったことによる。

I子どもの家は、その特色として、1) 快適で安全な環境 2) 発達段階にふさわしい屋外環境 3) アンチバイアス教育の採用 4) プログラムの系統的管理および継続的な職員の研修の4点を挙げ、アンチバイアス教育に関しては次のように説明している。

クラスには様々な人種、国籍の子どもが在籍している。子ども達は、人種、民族、ジェンダー、文化、言語、能力等の違いについて、認識し、敬意を払う機会を与えられる。子ども達は、また、我々のアンチバイアス教育を通して、これらの社会的カテゴリーを越えて、経験や興味における共通性を認める。⁽¹⁰⁾

この記述をみる限りは、外国人が多く居住する地域に位置し、文化的背景の異なる子どもを受け入れていることがこのカリキュラム導入の契機であったようで、特に不可視的な差異については言及していない。なお、同子どもの家に在籍する外国人の子どもは、2002年9月9日の時点では、ドイツ、フランス、インド、オーストラリア、中国である。

同子どもの家は、1歳児～5歳児74名を受け入れ、保育時間は、7:30～19:30の12時間、保育士は7名（その内6名が4年制大学卒、1名が短大卒）で、日本と同様、早朝と夕方についてはローテーションを組んで保育を行っている。園長は大学院生（博士課程）でもある。また、保育の基本は、S財団の方針をベースに、児童中心主義をとっている。

まず、I子どもの家に入ると、玄関に、多様な人種、民族の人を描いた絵が貼られており、また、階段の壁には、子ども達が描いた子どもの絵が貼られている。描かれた子どもは、様々な肌の色、髪の毛の色や髪質（ストレート、カーリ等）がみられる。これらの絵がどのような活動で描かれたのか園長に尋ねてみると、「私の友達」というテーマで、実在する人でも想像上の人でもよいので描いてみるように声をかけ、出来上がった作品であるということであった。

人形については、ダーマン・スパークスらが使用するペルソナ人形ではなく、S財団の研究所で作られている人形⁽¹¹⁾や外国の縫いぐるみの人形⁽¹²⁾があった。ペルソナ人形と同様に、S財団の人形は、子どもを模した人形だけでなく、祖父母、父母、子どもを表す家族の構成員すべての人形が揃っていた。祖父母は韓国の伝統的な民族衣装を纏っており、着せ替えて遊ぶことができる。(ペルソナ人形のように、障害者の人形、多様な人種の人形はみられなかった。)⁽¹³⁾このように日々の保育における環境構成において、多文化に配慮した保育がなされているといえる。

4. 3 アンチバイアス教育のカリキュラム

I子どもの家では、保育者達がアンチバイアス教育についてアメリカの実践書を読み、研究した上で、自分たちの子どもの家でのカリキュラムを作成し、報告書にまとめている。2001年の重点プログラムとして、屋外遊びプログラムと共にアンチバイアス教育を挙げ、その必要性を、「韓国は単一民族国家である」ため、文化的差異はあまり存在しないが、韓国社会は「世界民族と共に生きる知恵を得るべき時」であり、「各々の国は自民族本位の閉鎖性をもって生きるのではなく世界市民としての態度と役割を果たすことが要求されている」⁽¹⁴⁾と説明している。アンチバイアス教育について、3、4歳児を対象に年間を通して実践したカリキュラムは表1の通りである。また、表2～表4にその指導案と子どもの発話記録を示す。

<表1> 年間アンチバイアス教育計画案

月	テーマ	目 標	活 動 内 容
4	私	<ul style="list-style-type: none"> *子ども達がお互いの身体的な違いについて自然に感じ尊重するようにする。 *子どもたちが自分と他人の身体的特性について尋ねることを促進する。 *子ども達の生物学的自己認識と性役割の間の関係について理解することで、健康な性の自己認識をもつように促進する。 	<ul style="list-style-type: none"> *美術活動-私たちは多様な〇〇をしています。(肌の色、髪の毛・色、瞳の色、目の形) -自画像を描く -カツラ、目コラージュ -私を表現した人形作り *言語活動-身体的特徴に関する本作り(私の本) *話し合い-身体障害をもつ友達の紹介 *科学活動-身分証明書作り(指紋の観察) *童話-Ben's trumpet -Brown Bear, Brown Bear, What do you see?
5	友達	<ul style="list-style-type: none"> *障害をもつ人と共通点が多いが、ある特定の点は違うということに対する理解を促す。 *子ども達が発達の速度が違う友達と、互いについて理解し、自然で公平に相互作用できる能力を発達させる。 	<ul style="list-style-type: none"> *言語活動-「私たちは皆特別である」本作り→子ども一人当たり1ページずつ自分自身を表現(性、障害を扱うときも有用と思われる) *話し合い-疎外された友達-友達と私は同じ点、違う点があります。(大きい友達・小さい友達、障害をもつ友達の紹介など) *ロールプレイング-体の不自由な人が使う道具を使ってみる *童話-私たちだけの小さな家(背高いハンス、ピーターの物語) -You And Me, little bear -My friends and me -ビバーとメアリー

月	テーマ	目 標	活 動 内 容
6	家 族	多様な家族形態があることを理解する。 *子どもたちを定型化された性役割についての固定観念から自由に考えられるようにする。	*家庭連携プログラム - 家族新聞作り (家族たちの特色が含まれるように製作。芸自慢、音楽、料理…) *言語活動 - 家族アルバム作り (学級書) - 家族地図作り *行事-特別な日: 家族の日 (親の日) *童話 - Grandpa - ウィリアムの人形 - 羽のないアヒル、ボルカ - 私には音が聴こえない妹がいます
7	私の近所	*人々は他人と一緒に働き互いに助け合うということを知る。 *全ての男児・女児を身体的、認知的、感情的、そして社会的成長に必要な活動に参加させ男女が互いに対等な発達をするようにする。 *男性と女性全てが同等の能力をもって働くことを知り、職業に対する先入観を減らすようにする。	*言語活動 - 私の近所 (写真アルバム) →自分が住んでいる町について短い文章で表現 *話し合い - 近所の人: 自分を助けてくれる近所の人を紹介 *童話 - 幸福な清掃員 - 母はパイロット - かつこいい骨
9	動 物	*固定観念に対してクリティカルに考える。 *動物虐待と動物保護に関心をもつ。	*話し合い-「アンディとライオン」: 公正・不公正に対して話し合う - グリンピース団体の話 *童話 - The girl who loved wild horses - アヒルの赤ちゃんに道を開けてください。 - Hey, AI (おじさんアルとエディ)
	交通機関	*乗り物はそれぞれ独特の模様と使われ方がある。 *世界各国の特徴ある交通手段と道路の様子を調べる。	*話し合い - いろんな国の交通手段について調べる (2階建てバス、中国の自転車道路、シクロン…) - 交通事故によって障害をもつようになった友達の紹介 *童話 - 機関士: Freight train (貨車)
※ 11	世界の国々	*世界の国々の文化的 (衣、食、住、音楽、踊り、美術作品…) 類似性と違いに好奇心をもって共感できるようにする。	*言語活動 - 多様な挨拶の仕方 - いろんな国の言語で聴いてみる→簡単な挨拶の言葉 (父母に協力を要請、録音) *探索活動 - 料理の紹介、試食→家族が好んで食べる料理の紹介 - 多様な料理作り *言語活動 - 似ている内容の童話の比較 (お日様とお月様になった兄弟、ロンボポ、赤い頭巾…)
10	秋	* (色々な国々) 収穫の喜びを祝う特別な日の共通点、違いを調べる。	*話し合い - お盆、収穫の感謝祭、クエンザ、スコ、ミカヒキ…など→収穫の喜びを祝う特別な日 *童話: ソリのお盆の話
11	世界の国々	*世界の国々の文化的 (衣、食、住、音楽、踊り、美術作品…) 類似性と違いに好奇心をもって共感できるようにする。	*美術活動 - パスポート作り - 地球村を作る (家作り) →多様な材料を使用、なぜその材料を使ったのかな? - 私の人形に民俗衣装を着せる *音楽活動 - 民俗ダンスを真似してみる (Video資料) - 民俗音楽を鑑賞する *童話: Everybody cooks rice *Video: 笛吹き牧童 (水墨画アニメ) *「博物館の日」: 衣装、小道具…など展示
1	機械と道具	*障害をもつ人たちの生活に役立つ機械と道具を使ってみる。	*美術活動 - 私たちが作った自動車 (共同作業) →子どもたちの役割を分担し、廃品を使った車制作 *童話 - 一歩、一歩 - 偉人伝: エジソン、チャンヨンシル……

出典: I子どもの家『2001年I子どもの家年間報告書』2001年、101-103頁

※ 9月と10月の間に11月が入っているが、出典の報告書の記載のまま日本語訳を掲載する。

<表2>アンチバイアス教育実行計画書（満4歳児クラス）

活動名	体の不自由な友達	
活動目標	障害をもつ人たちが使う多様な器具の使用用途を知り、援助方法を経験する。	
活動方法	探究活動	
	導入、展開方法	子どもの発話の記録
	<p>- 車椅子と歩行補助器具、松葉杖、目の見えない人のための盲導犬などを、話し合いの時間に紹介し提供しようと、窓際においておく。それを子どもたちが使わせてという。</p> <p>- 子どもたちが使ってみるように提供し、正しく使えるよう情報を提供する。</p> <p>- 障害をもつ人たちが使う道具をおもちゃとして使わないように十分話し合う。</p>	<p>子ども1：先生、あそこの窓際にあるのを見せてください。</p> <p>保育者：後で話し合いの時間に一緒に見ましょう。</p> <p>子ども1：大事にして遊ぶから。私あれ見たことあるの。</p> <p>保育者：どこで見たの？</p> <p>子ども1：おばあちゃんが病院に行くとき、おばあちゃんが乗っているの見たよ。</p> <p>保育者：おばあちゃんがどうして乗って行ったの？</p> <p>子ども1：大変だから。立っているのが大変だからあれ乗ると動き回ることができるんだって。(車椅子を使えるようにする。)</p> <p>保育者：落ちないように気をつけて。</p> <p>子ども1：はい。ゆっくり押します。強く押すと調子の悪い友達が落ちてしまうから。先生。これ脚の痛いおじさんも乗れるものだよ。それから、このように（人形の腕で車輪を回しながら）すれば押しなくても進むよ。</p> <p>保育者：車輪を手で回すと一人でも動かせるのね。</p> <p>子ども1：このように速く速くすればよく進むよ</p>
評価	<p>*病院に行く時見た記憶を友達にも説明し、本人も障害を持つ人が使う道具を気をつけながら使った。</p> <p>*車椅子、松葉杖、盲導犬をどう利用するか正確に理解していたので真剣に話し合いができた。</p> <p>*歩行補助器具は子どもたちが接したことがなかったのか、使い方とその用途をよく理解できなかった。保育者が何回か手本を見せても、そのサイズが小さくて、よく理解できないようだった。</p> <p>*障害者が使う道具を、子ども達がおもちゃとして使わないように十分働きかける必要があった。</p>	

出典：I 子どもの家『2001年 I 子どもの家年間報告書』2001年、104頁

＜表3＞ アンチバイアス教育実行計画書（満4歳児クラス）

活動名	様々な髪の毛の色	
活動目標	友達の髪の毛を観察し、自分の髪の毛と比べてみる。	
活動方法	話し合い	
	導入、展開方法	子どもの発話の記録
	<p>何日か欠席した子どもが髪を染めて登園する。 -子どもたちが髪の色に関心をもつと、自分の髪の色を簡単に詳しく観察できるようにビデオカメラをテレビにつないで拡大して見るように用意する。 -自分の髪の色をテレビ画面で友達と一緒に観察した後、友達の髪の色を目で直接確認してみようとする。 -必要であれば虫眼鏡を使うようにする。 -友達の髪の色を観察し、どんな色か、自分のものとはどんな違いがあるかについて話してみる。</p>	<p>（保育者がビデオカメラを使って子どもの顔を映した後、髪の毛の方にズームアップしていく） 子ども1：髪の毛だ！先生、ドンヨンちゃんの髪はカールしているようだよ。 子ども2：髪の色が少しずつ違う。 子ども3：茶色だけどちょっと濃い。 （染めた保育者の髪の毛を映す。） 保育者：先生の髪の色はどう？ 子ども2：先生の髪の色は茶色でしょう？ 保育者：茶色に見える？先生の髪の色は茶色です。さあ、この友達の髪の毛はどんな色？ 子ども3：黒。 子ども4：ヨンフの髪の毛は短い。ドンヨンは長いのに。でしょう？ （他の人種の子どものたちの写真を見せ、髪の色を一緒に見てみる。金髪の子どもの写真を見て） 子どもたち：とてもきれい。でしょう？ 保育者：金髪が気に入った？金髪は白人たちだけにありますが、私たちのようなアジア人や黒人が金髪にしたければどうすればいい？ 子ども5：染めればいいの。私の母も黄色に染めたよ。</p>
評価	<p>*最初導入時は髪の色が違うことを気づかせようとしていたが、子どもたちは長さの違いまで区分できていた。髪の毛の状態、黒人の天然パーマやパーマをあてた髪、ストレートの髪といった表現ができた。 *白人の女の子の金髪(黄色の髪と表現)に大いに関心があるようであった。 *多様な人種の人たちの写真にしばしば接しているからか拒否反応がかなり減ったようである。</p>	

出典：I子どもの家『2001年 I子どもの家年間報告書』2001年、106頁

<表4> アンチバイアス教育実行計画書（満4歳児クラス）

活動名	友達顔を飾る	
活動目標	人の肌の色は少しずつ差があることを知る。	
活動方法	美術活動	
	導入、展開方法	子どもの発話の記録
	<p>－4枚くらいの色紙で顔の形を切り取り、お気に入りの色や自分が作りたい友達の顔の色と似ている色を選び飾る。</p> <p>－目、鼻、口は雑誌から切り取って貼り付けられるようにする。（雑誌の中に子どもたちが切り取れるサイズの人の顔があまり掲載されていないので、雑誌をたくさん用意しておく。）</p> <p>－髪の毛は毛糸をたくさん用意し、飾りたい色を選べるようにする。</p> <p>－3～5人の小集団で活動する。</p> <p>－自分が飾った友達の顔を他の友達に紹介する。</p>	<p>子どもの発話の記録</p> <p>保育者：皆さん、これは何に見えます？</p> <p>子どもたち：顔です。</p> <p>保育者：顔みたいね。そう、これは顔の形に切り取った紙だけど、これで何ができるかな？</p> <p>子ども1：絵を描きます。</p> <p>子ども2：違う。飾りをするのでしょうか？</p> <p>保育者：これで何をするかといえば顔を飾るのだけど。友達の顔を飾るの。</p> <p>子ども3：私はママの顔にする。</p> <p>子ども4：それじゃ私はパパの顔にする。</p> <p>保育者：それでは自分が好きな人の顔にしましょう。</p> <p>（材料を紹介し活動を開始する。）</p> <p>子ども5：先生、私チョコレート色の顔にする。</p> <p>子ども4：私はこれ。（少し濃い色の顔模様の紙もたくさんの子供たちが選んで使う。）</p> <p>子ども2：赤色の髪にしよう。きれい。</p> <p>子ども3：私は緑にする。長い髪だよ。</p> <p>（子どもたちが黒や茶色の毛糸はほとんど使わない。）</p> <p>（自分の作ったものを友達に紹介しながら）</p> <p>子ども6：私のママだけど。髪を緑に染めたし、口紅をつけたの。</p> <p>子ども7：おばあちゃんです。顔が日焼けしている。それで黒いです。</p>
評価	<p>*最初は友達の顔の色と似ている紙を選んで飾ろうと計画したが、子どもたちの反応に従って、自分が飾りたい人の顔を飾るようにした。</p> <p>*多様な色の髪を毛糸で表現（赤、緑、白）し、ある子どもが髪を染めたといってカラーの毛糸を使うと、黒や茶色の毛糸を他の子どもたちも使わなくなる。</p> <p>*飾り終わった後、裏面に使えなくなったCDを貼り付けて、友達に誰の顔を飾ったのか話してみるようにした。</p>	

出典：I 子どもの家『2001年 I 子どもの家年間報告書』2001年、108頁

また、報告書には、「アンチバイアス教育が観光的アプローチに陥らないように年間計画のテーマに統合し、実行した。アンチバイアス教育の資料には、多民族国家を基本的な枠組みとした理論と活動が提示されていたため、すべての保育者達が研修を通じて理論を学び、新しい単元を始める前にブレインストーミングを行い、計画を検討し、多様なアイデアを盛り込んだ。」⁽¹⁵⁾との説明があり、次年度はさらに検討を加え、実行する予定であると付け加えられている。

このことから、最初は、「単一民族国家」である韓国と「多民族国家」であるアメリカでは事情が異なるので、アメリカの実践を学び、そのまま導入しようとしたが、ブレインストーミングの過程で、韓国の状況に合わせた活動へと軌道修正が加えられていったと考えられる。

1996年に筆者がアメリカで行った調査⁽¹⁶⁾では、アンチバイアス教育は特定の活動の枠組みの中で行われるものではなく、日々の活動全般を通じてなされるものであると説明を受けた。I子どもの家のようなきっちりした計画案が書かれること自体、「日々の活動で問題となることが起こった時、それを捉えて、話し合いを中心にアンチバイアス教育が展開されるというアメリカのやり方と異なる。しかし、表2～表4の「子どもの発話の記録」にみられるように、教え込むのではなく、保育者と子どもとの言葉のやりとりで活動が進められているのは、アンチバイアス教育の趣旨にかなうものである。

I子どもの家の実践では、日常生活と結びつけ、ツーリストアプローチに陥らないような配慮が丁寧になされている。また、差異への気づきのため、あるいは、自己認識の形成のために、アメリカのアンチバイアス教育では、鏡を使った活動をしているが、I子どもの家には、いたる所に鏡が設置されていた⁽¹⁷⁾。鏡はアンチバイアス教育を導入する以前から設置していたが、同教育を導入後は積極的に使い始めたという。

また、家族を巻き込んで活動をしていた点、障害を取り上げている点等は、アメリカとの共通がみられた。

園長先生より、今年度の活動として、興味深い話を聴取した。それは、ある子どもが交通事故で顔が変形してしまったそうである。周囲の子どもがそれをからかうのであるが、その子どもが交通事故のせいでこうなるとみんなの前で説明したら、友達も理解してくれ、からかわれなくなったという。保育者が周囲の子どもに「からかってはいけません。」という介入をするのではなく、その子どもが説明をする機会を準備し、皆で考えるというのは、まさに話し合いを中心とした好ましい展開であると考えられる。

おわりに

アメリカのアンチバイアス教育においては、2歳児が「肌の色」の違いに気付くことを取り上げている。保育の環境において、「黒」が否定的イメージをもたないように、また、常に、白人だけを反映するような人形や絵本を取り上げないよう配慮している。性や身体的能力の違いに関する活動は、日本や韓国にも共通する点が多いが、一方、日本や韓国の社会では、「肌の色」のように可視的な差異の他に、不可視的な差異による差別や偏見がある。さらにI子どもの家で聴取した話では、韓国においては、都市部と農村部において意識の違いが大きいという。固定的な性役割にとらわれないという活動も、農村部ではかなり問題があるようである。

大きく言えば、「不可視的な差異」という点で共通点がみられるアジアという地域の特性、さらにまた、狭い範囲で言えば、韓国や日本等、1つの国の中にはそれぞれの地域の特性がある。今後はそのような地域の実情に合わせたアンチバイアス教育の展開を考察する必要がある。

※本調査において、韓国の大邱大学の鄭錦子教授に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

※本研究は、2001-2003年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））「幼児期からの国際理解教育構築への多角的アプローチ—教育学・発達心理学・人類学的観点から—」による研究の一部である。

注

- (1) 文部科学省の統計による。
- (2) クァックヒャンニム「幼児教育機関における多文化教育課程」中央幼児教育協会『2000幼児教育学会 多文化時代の幼児教育』2000年、103頁。
- (3) 研究グループの構成員は、山田千明、塘利枝子、廿日出里美、渋谷恵、久保田力、松尾知明、柴山真琴の7名である。
- (4) 丹羽孝「第1部 第7章 韓国」（日本保育学会編『諸外国における保育の現状と課題』世界文化社、1997年）99頁によれば、詳しい保育施設の類型には、家庭育児、職場託児、地域オリニチップ、訪問託児、オリニチップ、幼稚園全日班、社会福祉館〇〇教室、農繁期オリニチップ、その他（研究機関）がある。
- (5) 1999年10月29日～10月30日に国際幼児教育学会20回大会がソウル中央大学校で開催された。そのオプションツアーとして1999年11月1日に2機関を訪問した。
- (6) 父親と母親の国籍が異なる子どもについて、「ハーフ」と呼ぶのを改め、「ダブル」あるいは「国際児」と呼ぼうという主張に従い、筆者は「国際児」という名称を用いる。
- (7) 「虎が煙草を吸っていた頃」とは「昔」を表現する言い回しだそうである。

- (8) 中央教育審議会答申<文部省 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第1次答申)、1996年>「第2章 国際化と教育」より。
- (9) 玉置哲淳氏も『人権保育のカリキュラム研究』(明治図書、1998年) 141-144頁において、その難しさを指摘している。
- (10) 2002年9月に入手したI子どもの家のパンフレットより。
- (11) S財団は人形だけでなく、多くの種類の遊具や玩具を作っている。
- (12) 外国の人形として見せられたのが、日本の「クレヨンしんちゃん」の人形であった。
- (13) 『I子どもの家年間報告書』によれば、2001年の3歳児の活動で、「事情ありき人形」を用いている。それが、ペルソナ人形に当たるのではないかと考えられる。
- (14) I子どもの家『I子どもの家年間報告書』2001年、97頁。
- (15) 同上書、100頁。
- (16) 詳細は拙著「幼児期における多様性尊重の教育—Anti-Bias教育を手がかりとして—」(筑波大学比較・国際教育学研究室『比較・国際教育学』5、1997年)を参照されたい。
- (17) I子どもの家以外でも、韓国の子どもの家や幼稚園には、保育室に鏡台を置いたり鏡を掛けてあるところが多いような印象を受けた。ある幼稚園で、鏡を置く意味を尋ねたら、子どものままごとの中で、おしゃれをするためとの回答があった。